

コメント 日本史学専修 今井 修

両報告は、近代歴史学の特質を植民地支配との関係性から問ううえで、示唆に富む分析課題を提示した刺激的な内容であり、従来の研究の欠落部分をあらためて確認させ、今後の研究の必要を促す意欲的なものである。

植民地支配に果たした日本近代史学の役割、その帝国主義イデオロギー検証の重要性をめぐっては、すでに一九六〇年代に、「帝国主義的歴史観」と対決する「歴史像再構成の課題」として、石母田正や旗田巍らの鋭い問題提起があったが、にもかかわらず史学史研究の分野で必ずしも十分な実証的成果（たとえばE・ウィリアムズ『帝国主義と知識人』のような）が蓄積されてこなかったことこそ今日の問題、歴史学の弱さがあり、戦後歴史学的方法的反省と模索の起点でもあった六〇年代状況との相違が明確化している九〇年代末の現在、こ

れらの自覚にもとづいた問題意識による具体的成果が求められているといえよう。

松園報告を日本近代史学史研究にとつての課題という観点から意義付けると、近代イギリス歴史学受容の諸相を史学史はもとより思想的視野において検証する必要性の喚起である。シーリーの影響という点では、報告で指摘のある浮田和民をはじめ、徳富蘇峰の「転向」問題、また早くも坪内逍遙が『早稲田文学』第三五号（一八九三年三月）の「史論四派」で言及していることなどが注目される。さらに、イギリス史研究の面では、韓国併合に際し日本近代史学が概ねその歴史的正当化に奉仕するなか、「他日之が日本のアイルランド問題を起す起源とならないかとの疑問」から「アイルランド自治問題」を卒論に選び、その研究を出発させている今井登志喜の事例（『明治末の学生』）などは、西洋史学の発達に占める今井の役割の大きさから考えれば、重視されてよい。

李報告が検討した黒板勝美も、これまで

ほとんど研究がなく、そのこと自体が歴史学界の戦前・戦後に持続する体質と史学史研究の歪みを示す好例である。ただし、近年ようやく「近代日本の文化財問題」の追究やその視角からする黒板への言及も見られるようになった。日本近代史学が「国民国家の鑄型のなかで想像の共同体創出のための物語を再生産」してきた役割を明らかにし、今日なお保持されている問題点を剔抉する李氏のきめこまかな論考の一環として、本報告からも学ぶべき点は多い。報告に即して課題を挙げれば、黒板をはじめ国民教化と近代史学の関係性をより総体的に解明していくこと、黒板個人についてもその多面的業績や幅の広さをどう内在的批判的に理解するか、全面的検討がこれまで皆無であるだけに要求されよう。なお、二報告に関連して、近刊の大野真弓『西洋史学への道』と李進熙『海峡』が、多くの示唆を与えてくれる自伝となっている。